

茜色の歌姫



第三部 有馬皇子の変



飛鳥時代の武人

そがのあかえのおみ
蘇我赤兄臣、有馬皇子に語りて曰く、「天皇の治らす政事、三つの失あり。大きに倉庫を起
てて、おほみだからのたから財を積みあつむ聚ること、一つ。長く渠水みぞを穿りて、ひとのくひもの公糧を費やすこと。二
つ。舟に石を載つみて運び積みて丘にすること、三つ」といふ。有馬皇子、(中略)欣然よろこびて曰は
く、「吾が年初めて兵いくさを用ゐるべき時なり」

(中略)是の夜半に、赤兄、物部朴井連、鮪を遣はして、(中略)有馬皇子を市経の家に囲む。
(中略)皇太子、親ら有馬皇子に問ひて、曰はく、「何の故か謀叛けむとする」とのたまふ。
答へて曰さく、「天と赤兄と知らむ。吾全ら解らず」

『日本書紀』卷第二十六

春過ぎて夏来るらし 白妙の衣干したり 天の香具山

『万葉集』卷第一

第四章 熟田津 658

夏がすぎ、秋となった。ようやく、飛鳥の田に茂る稲に、青い穂がつき始めていた。
「夜止か」

岡本宮の奥深くに与えられた邸の中庭の亭に独り、琴をかき鳴らしていた額田郎女は、弦を爪弾く手を止めず、背後の茂みに声をかけた。

七日に一度、額田郎女は、誰一人立ち入ることを許さず、庭にこもって曲を作る。曲が出来れば、十市皇女を招じ入れ、踊りを考案させる。曲は歌舞となつて大王に献じられ、宮中で行なわれる儀式や祭で披露され、諸国の民に伝えられる。

宝大王に歌人として召されて以来、この慣わしはずっと続いていた。しかし、五年ぶりに大海人皇子と再会してより後、中庭での曲作りは、別の意味を持ち始めた。

土蜘蛛のなかでも、夜止は、容姿はさほど目立たず、振る舞いも慎ましげであったが、確かな働きぶりで、信を得ていた。同時に、鏡郎女の酷薄な仕様に疑いを抱いており、自然、額田郎女に心を寄せた。

鏡郎女の出自を探る――。来るべき、対決の日に備えてそう意を決めた額田郎女は、まず夜止を誘った。夜止は、しばし考え、額田郎女に随う、と応えた。

夜止は、自らの息のかかった土蜘蛛に命じ、鏡郎女の出自に関する事どもを集めさせていた。

そして七日に一度、岡本宮に忍び入り、額田郎女の邸で、集まった報せを告げるのである。

「加賀美の里より、報せが来た」

夜止は声を潜め、茂みから姿を現さぬまま、言った。

加賀美の里は、筑紫の北岸、海を越えれば、伊伎、対馬を経て、三韓に到る。数十の漁人の住む佐しい里であったが、かがみ、というその名に、夜止は一縷の望みを抱き、手の者を遣わしたのである。

探らせてみればみるほど、鏡郎女の出自の分からなさに、額田郎女は驚いていた。越か吉備より、王族の連枝と称して飛鳥に流れ来た田村皇子、すなわち大海人皇子の父が、かの炊屋大王の寝屋にて寵愛を得て、やがて大王位を篡奪してしばし後、鏡郎女は、箸墓の土蜘蛛を率い、飛鳥に姿を現した。以後、宮中の抗争には、必ずといってよいほど、鏡郎女と土蜘蛛の影が見え、争いが重なるほど、鏡郎女の地位は上がっていった。

もともと、箸墓の地には、大物主と交わったため、陰を箸を刺されて死んだという、百襲媛を祭る巫覡の女たちが、男の立ち入りを禁じて里をなしていた。その女たちが、古の伝説に記された土蜘蛛となったのは、どのような経緯があったのかは分からない。

ただ、鏡郎女が飛鳥に姿を現した時期は、箸墓の巫覡が土蜘蛛に変じた頃である。飛鳥の近隣にそれ以前の鏡郎女の姿が見えぬことから、いづくからか流れてきて、巫覡の女どもを武装させ、鍛えたものと思われた。

夜止は、諸国に派された鏡郎女の意を受ける土蜘蛛どもの監視の眼をかいぐり、そこまで調べ上げていた。

「今から二十年近くも前、加賀美の里の浜に舟が流れ着いた。乗っていたのは十三、四の乙女が一人。言葉解さねど、その装束から高貴の出と見えた。里長は乙女を大事に慈しみ、加賀美媛の名を与えて敬った」

おそらく、百済か新羅か、三韓の地より筑紫に到ったのではないか……。

夜止はしばし息を継ぎ、さらに語った。

「一年の後、加賀美の里を、十を越える舟が襲い来たった」

瀬戸の海で漁をする者どもが、不漁の折などに、武装して海賊となり、沿岸を荒らしまわることがある。その類の者どもであろう。

「加賀美媛なる乙女は、里の者どもを率い、自ら剣を振るい、賊の半ばを倒したが、里の者も数多く殺され、媛はさらわれたという」

その後の行方は分からない。されど……。

「海賊どもの根城は、おそらくは伊予。その地の者より、ふぐりを一つ、砕かれた海賊がいると聞いた」

夜止の聲が、震えを帯び始めた。

「しかもかつて、伊予の山奥深く、海賊の根城に近きあたりに、女どものみが住む里があったという。今はあとかたもないが……」

一瞬、琴を鳴らす額田郎女の手が乱れた。すぐさま、調子を取り戻したが、郎女の唇はかすかに動いていた。

「吾は、自ら伊予に行く」
夜止はそう言い、口を噤んだ。
確かに……。

かつて、伊勢に住まうていたという土蜘蛛。彼らが棲家を追われ、海づたいに伊予に渡ったとすれば。

海賊にさらわれた加賀美媛——鏡郎女が、その地で、土蜘蛛の末裔とも出会ったとすれば。伊予に残っていた土蜘蛛を随え、三輪なる箸墓に至ったとすれば……。辻褄はあう。

「恙ない旅を」

額田郎女は口を開き、首に懸けた玉を茂みに投じた。茂みから白い手が突き出し、玉をつかんで消えた。

高価な玉は、伊予への旅の費えとなるはずであった。

夜止の気配が消え、額田郎女は琴の音を止めて、周囲にそっと眼を配った。人の立ち入りを禁じているとはいえ、どこに鏡郎女の手の者が潜んでいるとも限らない。

気配はない——。

それを確かめ、額田郎女は、再び琴を鳴らしはじめた。

古伝によれば、神々が大和の国を産んだ折、二名の島と呼ばれた地は四つの面があったという。愛らしい乙女の貌をした愛比売、猛々しい男の貌をした建依別、さらに飯依比古、大宣都比売。その後、それぞれの国は、伊予、讃岐、阿波、土佐、と呼ばれるようになった。

難波の津で舟を仕立て、瀬戸の海に漕ぎ出した夜止が、伊予の熟田津に入ったのは、岡本宮に額田郎女を訪なつてより、五日の後であった。

津とはすなわち、舟が立ち寄る港を言う。深い入り江の磯に板を並べた棧橋が組まれ、舟の出入りを見張る官人や矛を構えた兵どもが、聳える櫓の周りにたむろし、さらに、商人や、漁人に軀を売る遊女が賑やかに集っていた。

額田郎女の意を受けて伊予の熟田津に至った土蜘蛛の夜止は、官人の眼を避けるため、津よりやや離れた磯に降り立った。その磯には、里の乙女のなりで、腹心の土蜘蛛が待っていた。

「荒和気は、いま、日振にいる」

呉葉という名の土蜘蛛は、そっと夜止にささやいた。

「日振の島までは、ここより、さらに舟を仕立てて二日。すでに、この地の漁人が調べている」
「諾」

二人の土蜘蛛は、磯の尖り岩を踏みつつ、去った。

日振の島は、伊予の西岸、宇和の沖にある。海面から崖が切り立ち、入り組んだ岸のところどころに、外からは見えぬ入り江に津が作られていた。

すでに呉葉は、宇和の漁人を通じて、日振の海賊どもにわたりをつけていた。しだいに島影が大きくなるにつれ、いつしか波間をわけて三艘の舟が現れ、夜止を乗せた舟を囲んだ。乗っていたのは、腰に布を巻いたきり、逞しい半裸をさらし、背や腰に剣を帯びた男どもであった。

宇和の漁人が何か叫んだ。海賊どもは領き、手招きした。彼らの導くままに、島の裏手に回り、

岸に舟を漕ぎ寄せた。

荒磯に板を敷いただけの津に降り立ち、振り返ると、宇和の漁人は、舟を漕いで島を離れつつあった。

「明日、迎えに来る」

海賊の一人が夜止にそう言い、背を向けた。津から岩をつたっていくと、洞窟があった。海賊どもに随って洞窟に入ると、その奥深く、四人の男どもを伴い、荒和気が座っていた。

年は五十すぎか、髪は半ば白く、長年強い日差しと潮風にさらされた肌は、黒ずんで、ひび割れが目立つ。深く刻まれた皺の奥に、小さな眼が油断なく動いていた。

「飛鳥よりの客人とは、汝らか」

しわがれ声で問う荒和気に、夜止は腰にさげていた布袋を放って寄越した。海賊の一人が駆け寄り、布袋を拾い上げ、紐をほどいて口を開け、荒和気に示した。ぎつしりと詰まった玉や真珠に、荒和気は相好を崩した。

「古えの事を語るだけでよいのか」

「然り。さらに」

夜止は冷たく言った。

「今日、吾等がこの島に来たりしこと、誰にも言うな」

「諾」

頷く荒和気に、夜止は続けた。

「二十年前の事である」

「二十年前」

「汝等が、筑紫の加賀美の里でさらった乙女の事を聞きたい」

荒和気的面差しが厳しく引きつり、唇がゆがんだ。夜止は、さらに静かな声で、老いたる海賊の古傷をえぐった。

「汝のふぐりを一つ、砕いたという乙女の事である」

「汝等は！」

荒和気は吼え、立ち上がった。

「吾を辱めに来たか！」

拳を握り締め、夜止に詰め寄った。四人の海賊どもも、

腰の剣に手をかけた。

夜止の胸倉を掴もうと手を伸ばした荒和気は、不意に

四肢を強ばらせた。眼を引き剥き、唇は半ば開き、股間には、夜止の膝が食い込んでいた。

「確かにひとつ」

激痛に硬直した荒和気を、夜止は嘲った。

「残っていたな」

次の瞬間、呉葉は、間近な海賊の股間を蹴り上げた。

呻き倒れた仲間、残る三人が剣を抜くより早く、たちまち二人の土蜘蛛に、急所を撃たれ、地に這いつくばった。



日振島(愛媛県宇和島市)

身を二つに折り、股間に左右の手をあてがい、眼をつぶって悶える海賊どもに、夜止は叫んだ。
「汝等は出よ！」

呉葉は剣を抜いて、のたうち回る海賊どもを脅した。思うまま四肢を動かすこともかなわぬ海賊どもは、呻きながら這い、外へ去った。

「荒和気よ」

両手を脚の間に挟みこんでしゃがんだ老海賊の髪の毛を掴み、仰向けに倒しつつ夜止は言った。
「ありのままに話せ」

仰向けに倒れた荒和気の股間を踏みつけ、夜止は言った。荒和気は、夜止の足首を掴んで左右に激しく身を振った。

「話す！」

「虚言を言えば……」

一つだけ残るふぐりに乗せた踵を踏みしめると、荒和気は悲鳴をあげた。

ふぐりを二つながら失うことは、男にとって最大の恐怖である。

「話す……話すゆえ、ふぐりだけは……」

涙を流して懇願する老人を、夜止は冷ややかに眺めていた。

翌日。

すでに日は没しようとしていた。熱田津に程近い里には、拡がる田の傍らに、柱を四つ立て、葎や干し草をかぶせたばかりの田伏なる苦屋が並んでいた。

潮の加減によって、舟を出せない日もある。舟を出せない時は、津に近い里に並んだ田伏に寝泊まりするしかない。

「明朝は、潮もかない、舟を出せるそうな」

津の舟人に様子を聞きに行っていた呉葉が戻ってきた。

田伏に独り待っていた夜止は、そうか、と頷き、隅に置かれた瓶から水を汲み、平たい石を濡らし、腰にさげた袋から墨を取り出して擦り始めた。

「しばし待て」

夜止は、髪を縛っていた紐を解いた。太く糸を巻いた紐をほぐすと、細く紙縫に巻いた油紙が出てきた。筆を墨に浸し、紙を広げ、荒和気から聞き出した話を書き記し始めた。

……二十年前。

荒和気ら海賊どもは、六艘の舟に六十人が乗り込み、筑紫を目指した。百済より、珍宝を積んだ舟が筑紫に向けて出帆した。荒和気は、対馬の沖でその百済舟を囲んだ。多くの軍兵を乗せた百済舟は頑強に抗った。宝を奪い、百済舟を焼き、乗っていた官人、兵、水夫はことごとく沈んだが、荒和気もまた、一艘の舟と五人の海賊を失った。失った舟には、帰途のための水や米が積んであった。食糧を失った荒和気らは、南下して筑紫にいたり、近くの里を襲った。それが加賀美の里であった。

荒和気みずからは二十人とともに浜に残り、三十五人をして加賀美の里を襲わせた。やがて、一人が戻ってきて、こう告げた。

手強い乙女あり。すでに十人を倒された。

荒和気は急ぎ、岸には五人を残し、十五人を率いて加賀美の里に向かった。着いてみると、里人の多くは倒され、十三、四の乙女を十五人が折り重なるように押さえつけていた。その周囲に、二十人の海賊が、屍となつて倒れていた。

海賊どもは、乙女をすぐさま、殺すようわめいた。だが、荒和気は、乙女の美しさに打つたれた。縄で縛り上げ、舟に乗せるよう命じた。

乙女は、海賊の根城である日振に到るまで、無言だった。荒和気が自らの寢屋まで乙女を運ばせたときも、うなだれるばかりで、懲懣と随った。

荒和気は、性根の強い女を姦すことを好んだ。微塵も抗う気配を見せぬ乙女に、かえつて拍子抜けした。

だが、それは乙女の擬態であつた。寢屋に入るや否や、乙女は荒和気の右のふぐりを握り碎き、半死半生で悶える海賊を尻目に逃げ去つたのである。島から対岸の宇和の浜まで二十里（約10キロメートル）を泳いで。海に飛び込むまでの間に、さらに三人の海賊が命を失い、五人の海賊が男でなくなつていた。

それから五年の後、乙女は再び、日振に姿を現した。十人の乙女を随えていた。黒い袴に白い裳、髪を結い上げ後頭部で結んだ乙女の姿に、荒和気は怖気を振るつた。

舟を二艘、借りる。

居丈高な物言いに、荒和気の碎かれたふぐりの傷痕に、痛みが蘇つた。幾人かの海賊が、不意に訪れた権高な乙女に激高し、剣を抜いた。瞬く間に彼らは血まみれの屍となつて転がった。

乙女は、さらに漕ぎ手を二人、要求した。

「まずは熟田津へ向かえ」

そう乙女は命じ、海賊どもは随うしかなかった。漕ぎ手に選ばれた二人は、熟田津に近い浜で、ふぐりをふたつ碎かれた。ようやく日振に戻つた彼らは、女どもが熟田津から難波へと向かつたと告げ、乙女の言を付け加えた。「このこと、誰にも漏らすな。もらせば、日振の者どもすべて、汝らと同じ目に遭わせる」……。

書き終えた夜止は、墨が乾くのを待ち、再び細く縫つた。さらに糸を巻き付け、紐に戻し、呉葉に渡した。

「これで髪を束ね、飛鳥の岡本宮なる額田郎女に渡せ」

呉葉は、強ばつた面持ちで頷いた。

夜止は、鏡郎女が土蜘蛛に出会つたであろう地へ赴く。配下にも明かさぬ秘密を探ろうとする夜止を、この地の、鏡郎女の息のかかつた土蜘蛛どもが、まったく気づいていないとは考えにくい。あるいは命を奪われる前に、まず得た報せだけでも伝えようという覚悟であることは、呉葉にも分かつていた。

しばし俯き、渡された紐を見つめていた呉葉は、やがてそれで髪を結い上げ、問うた。

「額田郎女とは……」

呉葉はためらいがちに問うた。

「命を懸けるに足りる方か？」

「さて」

夜止は微笑み、しばし考え、言った。

「汝は、常には鏡郎女の命に随う。この度は、額田郎女の命によって動いた。いずれに随うほうが、楽しいか？」

「額田郎女の命」

確か十六歳。頬が赤く、頬や額に吹き出物が目立つ呉葉は、すかさず頷いた。夜止は微笑み、重ねて問うた。

「何故に」

「さあ……」

呉葉は、しばし瞳を動かして考えをまとめ、やがて口を開いた。

「むかし、夜止がこの地へ来た折り、鏡郎女の命にて、吾等に逆らう豪族を討った」

「そうであったな」

「あの折りの夜止の面差しは、厳しかった。この度は、和やかに見える」

「呉葉よ」

夜止は遠くを見つめる眼差しで問うた。

「吾が母は、里の男どもに姦され、父は母の仇を討とうとして殺された。独り残された吾を救ってくれたのが鏡郎女であった」

呉葉は、初めて聞く夜止の過去に、耳をそばだてた。夜止は続けた。

「鏡郎女は、吾に言った。強くなって、汝が父母を殺した男どもを誅せよ、と。彼らを憎み、

その憎しみを糧に、強くなれ、と」

呉葉は、凝然と語り続ける夜止を見つめた。その瞳が潤んでいた。

「鏡郎女も、あるいは吾と、同じような目に遭ったのかもしれない」

三韓の地にて……。

そう呟いて、夜止はしばし口を噤み、やがて開いた。

「額田郎女もまた、土蜘蛛であったからには、おそらく、似たような目を遭うたのであろう。されど」

あの方は、人を憎まず、慈しむ。それ故に、吾は額田郎女に随う。

翌朝。

夜止と呉葉は、それぞれ違う舟の上にいた。

呉葉は、難波に向かう。

夜止は、熟田津より西、瀬戸に面した長浜なる地に向かう。

長浜より、二名島の山奥に、大きな河が地を引き裂くように流れている。その下流あたりに、女だけの里がかつてあった。

舟は長浜でいったん停まり、夜止はそこで別の舟を雇って河の上流に向かう。女だけが棲んでいたというその里が、土蜘蛛の祖の隠れ里であったとすれば、日振の海賊から逃れた鏡郎女が、その地に来たりて女どもをまとめ、再び戦う土蜘蛛となし、日振に随れ戻り、さらに難波に向かい、三輪の箸墓に棲み着いたとすれば、辻棲は合う。

舟が長浜に着き、その津で食を得、再び舟に乗って川へ入った。左右に拡がる砂の河原が、やがて切り立った崖となり、青かった川面は深い緑に変じていった。

舟人の操る櫂のきしみを聞きつつ、夜止は、漕ぎ行く先を見つめていた。彼女もまた、箸墓で鏡郎女に育まれ、鍛えられた土蜘蛛であった。いわば、その源となる地をこの眼でみることに、四肢が熱くなるのを抑えられなかった。土蜘蛛となったが故に、夜止は、己が父母を殺した里の男どものふぐりを碎いた。父を殺し、母を無理強いに姦した男どもは、今や岡本宮で奴として仕え、夜止の姿を見る度に、這いつくばって額を地につける。

夜止の心臓が早鐘を打ち、眼差しは一点に据えられていた。舟の後ろの川面が小さく波立ち、人の頭が現れ、舟に向かって泳ぎ始めるのを、彼女は気づかずにはいた。

七日の後の夜。

飛鳥なる岡本宮の奥深く、額田郎女は、小さく火を灯し、細かな字でびっしりと埋まった油紙を見つめていた。

夜止が伊予の熟田津で書き記した報せであった。聞けば、夜止は、その地で呉葉なる土蜘蛛にその書を託した。だが、呉葉が飛鳥に入った時、数人の抜剣した女どもに囲まれた。女どもをやつと振り切つて岡本宮に潜入した呉葉は、額田郎女の邸に仕える土蜘蛛に書を預け、息絶えた。総身に深い傷が十近くもあったという。

——鏡郎女。

額田郎女は、自らの策に随つて動いた、呉葉という貌も知らぬ乙女が、そのために命を落とし

たことに、唇を噛みしめた。

夜止は無事だろうか……。

ふと、懸念が湧いた。

鏡郎女の命に随い、多くの命を奪ってきた額田郎女であったが、自らの意で、人を死に追いやつたことはなかった。

鏡郎女と戦う……。確かにそう意を固め、大海人皇子にも告げた。大海人皇子を大王の御位に即けることが、多くの大和の民のためになる。そう信じていた。しかし、ひとりの土蜘蛛の死の報せに接し、額田郎女は己の脆さを知った。

鏡郎女ならば……。毫も心が揺らぐことなく、次の一手を思いめぐらし、すぐさま配下の土蜘蛛を動かしているだろう。

吾は、鏡郎女と戦えるほど、強くないのか。

身の震えをやつとのこと抑えつつ、額田郎女は、再び夜止の書に眼を走らせた。

鏡郎女は、筑紫の地に漂着する前は、おそらく三韓の地に住んでいた。そのことと、鏡郎女が三韓出兵にこだわることと、繋がりが無いとは言えない。

しかし、それを知つたところで、鏡郎女の弱みを握ることにはならない。もつと報せがほしい。しかし夜止は……。

夜止が書を託した呉葉が襲われたということは、夜止もまた……。

千々に乱れる思いに、額田郎女が頭を両手で抱えて突つ伏した時、背後の戸が静かに開いた。身を起こして振り向いた先に、鏡郎女が立っていた。

「夜止は死んだ」

鏡郎女は、氷のように硬い面差しで、口を開いた。

「……やと？」

額田郎女は、眼を見開き、やつと首を傾げてみせた。

「知つていよう」

冷たい応えが、刃のように額田郎女の心に突き刺さった。

やはり……。

鏡郎女はすべてを見抜いていたのだ……。

「何故に」

冷たい眼差しがしだいに揺れ、鏡郎女は声をかすかに震わせた。

「吾の出自を探らせた？」

なんのことやら……。

そう口にしようとして、喉から唇にかけて水気が失せ、思うように舌は動かなかった。

鏡郎女の目尻に、かすかに涙が溜まっていなければ、如何ようにも言い逃れるくらいは、易いことであつたろう。鏡郎女が、亜那と呼ばれていた幼い額田郎女を、殊更に眼をかけてくれたことは承知していた。一度、箸墓の里より解き放つてくれたのも、異例の沙汰であつた。

それだけに、額田郎女の裏切りに、鏡郎女が悲しみ、悲しみが強いだけ憎しみも深いであろう事は、察せられた。彼女の涙にこめられた憤りに、額田郎女は抗う氣力を奪われていた。鏡郎

女の静かな声音も、縄のように額田郎女の四肢と舌とを縛っていた。

「汝は、宝大王を生かしておきたいのであろう。大海人皇子を大王位に即けるために」

額田郎女は、必死に、貌を背けず、鏡郎女を見つめた。鏡郎女は、ふと微笑み、穏やかにつけ加えた。

「大王が崩御しようが、命長らえようが、いずれにせよ、吾の意のとおり、動く」

唇の震えを、額田郎女は止められなかった。

「策とは、そのように練るものぞ」

鏡郎女は踵を返して背を向け、鋭く言い放った。

「さかしらに動くな」

大股に出ていった鏡郎女の背を凝視していた額田郎女は、やがて俯き、拳を握りしめた。眼が潤み、涙が滴り落ちるのを、止める術がなかった。

「何故に」

額田郎女の邸の門を出ると、その傍らに佇んでいたのは、安見娘だった。

「額田郎女を殺さなかった」

「汝は……」

鏡郎女は、眦を決して、第一の配下をにらみつけ、押し殺すように言った。

「さかしら口を叩くな」

安見娘は、一瞬、鏡郎女を睨み返した。

二十年前、伊予の山奥、女だけの里の長の娘として、十を越えたばかりの安見娘は、やがて里を統べるべき身であった。しかし、突然現れた鏡郎女は、知識においても、武術においても、策においても、かなわぬ相手であることは、すぐに知れた。

やがて母が死に、誰が、女だけの里人を束ねるか、談合が行われた。里人の多くは鏡郎女を推した。安見娘もまた、笑みを浮かべて賛意を現し、以来、忠実に仕えてきた。

十余年前、鏡郎女が伊勢で巫那なる乙女を拾ってきた。確かに、巫那は、優れた土蜘蛛であった。十三にして、蘇我鞍作を討った。

だが、巫那は、土蜘蛛として動くことより、箸墓を出でて大海人皇子と睦み合うことを望んだ。

他の土蜘蛛の乙女には許されぬことであったが、何故か、鏡郎女は許した。その後、宝大王の側近く仕え、鏡郎女の策に抗う額田郎女を、何故か鏡郎女は排そうとしない。

安見娘は、妬みとともに、訝しがっていた。

そして今、明らかに敵意を現した額田郎女を、なおも鏡郎女は憎まないでいる。憎みたくても憎めない。その苛立ちを、二十年以上も仕えてきた安見娘にぶつけている。

総身をめぐる血が冷え、憤りが沸き上がるのを覚えた安見娘は、しかし、すぐさま、拝礼して告げた。

「報せがあり」

鏡郎女は、すぐさま冷静な土蜘蛛の長に戻り、問うた。

「なんと？」

「有馬皇子および皇子に同心する者、多くの兵とともに、市経の宮に集いつつあり」

市経は、岡本宮より北へ四十里（約20キロ）。生駒の山に囲まれた窪地にある。山道を通って兵を集めれば気づかれまい。かの浅はかな有馬皇子ならば、たやすくそう思いこんだであろう。

すでに、宝大王の余命、すでに幾ばくもなく明日をも知れず、との噂を流させていた。有馬皇子はまんまと策に乗った。

「安見娘よ」

鏡郎女は唇の端を歪めて笑った。

「葛城皇子にはすでに報せたか？」

安見娘は、同じ笑みを浮かべ、応えた。

「然り」

「いつもながら、手際の上よきことよ」

滅多に口にせぬ優しい言葉も、今の安見娘には、とくにありがたいとも感じられなかった。

市経の宮には、有馬皇子を中心に、物部鯨、守大石、塩屋小代ら豪族どもが、兵を率いて集っていた。その数、百五十余。やがて、蘇我赤兄が、飛鳥随一の豪族として千を率いて姿を現すはずだった。これに葛城皇子や中臣の兵が加われれば、二千に近い。

大王は崩御した。夜明けまでに、王宮の裡で鏡郎女ら土蜘蛛が争乱を起こす。混乱はさらに極まり、二千の兵でもたやすく王宮を制圧できるはずであった。

そう頼もしげな報せをもたらした蘇我赤兄の姿が見えぬことに、有馬皇子は苛立ちを隠せな

った。すでに夜は白み始めていた。払曉とともに軍を起こす手筈になっているというのに。

「いま一度！」

皇子は物部鯨に命じた。

「赤兄が邸に使者を走らせよ！」

「必ず動くことなかれ」

河辺宮では、寢屋に忍んできた額田郎女の女孀の言を、褥で身を起こした大海人皇子が繰り返していた。

「確かにそう、額田郎女が言ったのだな」

「然り」

女孀は、そう言い残して消えた。

「何が起ころうとも、動くなかれ、と」

日が昇り、恵みの光が飛鳥じゅうを照らしていた。

豊かに実った稲の穂が風に揺れていた。市経の有馬皇子の宮の周り、畦道を行き来する民人どもは、高く聳える塀越しに響いてくる苦吟と号泣に足を止め、こわごわと囁きあっていた。

塀の内では、百五十の兵が、悉く両手で股間を抑え、悶え転がっていた。

岡本宮。

太極殿の前庭には、有馬皇子以下、七名の豪族どもが、総身に傷を負い、貌は赤黒く腫れ上がり、齒は半ば折られて血を垂らし、冠を打ち落とされ、髪は乱れて惨めな態で、後ろ手に縄を打たれ、転がっていた。その傍らには独りずつ、笞を持った土蜘蛛どもが立っていた。

太極殿へと昇る階梯には、鏡郎女が、冷たい眼差しで謀叛の輩を見おろしていた。彼らは、早朝、市経の宮に兵を率いて参集した。岡本宮では、土蜘蛛どもの画策により、宝大王が崩御する手はずとなっていた。合図があれば、すぐさま岡本宮に攻め入り、大和を制圧し、昔日の既得の権を取り戻す……。

だが、大王崩御の報せのかわりに現れたのは、武装した土蜘蛛どもであった。将も兵も、ふぐりを蹴られ、激痛に身動きもかなわぬまま、将は岡本宮へと運ばれ、兵は悶え転がるままにうち捨てられた。

朝議が開かれなくなって久しい太極殿の前庭は、そのまま拷問の場となった。味方のはずの土蜘蛛に捕らえられた者どもが、罪を逃れようと互いの非を口にし、ついには、みなが声を揃えて有馬皇子を誹謗するのを、楽しげに眺めていた。有馬皇子は、はじめこそ罵り返していたが、やがて気力を失い、唇を震わせて、かつて盟を結んだ者どもの轟々たる譏りを浴び、黙すばかりとなった。

やがて、階梯に宝大王が姿を現した。

病にやつれ、髪はすべて白く、貌に刻まれた皺はより深く、眼窩は落ちくぼみ、手足は枝のように細く、足どりも不確かに、左右を采女に支えられ、しつらえた椅子にやつと腰を下ろした。叔母なる宝大王の出御に、有馬皇子は眼を見開いた。

「は、謀りたるか！」

「何を」

鏡郎女は冷たく問うた。

「謀ったというのか？」

額田郎女が、大王に供する食に、四肢を衰えさせるものを混ぜてなどいなかったことを、鏡郎女はすでに知っていた。宝大王を死に至らしめる気のないことも、承知していた。葛城皇子も、蘇我赤兄も知っていた。知らぬは、有馬皇子ばかりであった。

「すでに大王は崩御した」

有馬皇子は、虚空を見つめつつ、眩くともなく、叫ぶともなく、続けた。

「そう、蘇我赤兄は言った……否、使者を派して、そう報せた……否、あれは、葛城皇子の使者であったか……、それとも使者は二人だったか……、大王はすでに崩御し、岡本宮は混乱の極みにあり……今、兵を動かせば、たやすく陥ちると……」

声はしだいに呻きに似て、有馬皇子は俯せに、前庭の玉砂利に貌を伏せた。

「陽狂の態なり……」

鏡郎女は眼を背け、宝大王に告げた。

「昨夜、葛城皇子と蘇我赤兄が、有馬皇子の謀叛を報せてきた」

葛城皇子と蘇我赤兄の謀に陥れられた……そう悟った有馬皇子が、地面に額を打ち付けて悔いる姿に眼もやらず、凝つと大王を見つめつて鏡郎女は続けた。

「彼らは、皇子に逆心あることを知り、半年の前より、あえて皇子の側近くに侍り、如何なる謀

かを探っていたとか。大王の病、すでに重きことを聞き、有馬皇子が兵を動かすとともに、葛城皇子と蘇我赤兄は岡本宮に参り、そのことを報せた。故に、吾等も先手を取って動けた。すなわち……」

鏡郎女は、ゆつくりと言った。

「有馬皇子の謀を暴いた二人の功は大きい」

「謀とな？」

有馬皇子が血塗れの貌をあげて、大きく叫んだ。

「謀など……ただ、天と赤兄と……葛城皇子のみが知る……吾は何も解ぬ……」

「有馬皇子を」

鏡郎女は、有馬皇子を一瞥もせず、大王に問うた。

「如何すべきや？」

「殺せ」

宝大王は、眉根ひとつ動かさず、ただ、眼を陰鬱に光らせて、言った。

「たやすくは殺すな。この者の父であり、吾が弟なる豊日と同じく、二つのふぐりを碎き、さらに左右の手を剪り、左右の足を剪り、鼻を削ぎ、息絶えるまで、岡本宮より離れた地の樹に吊るし、鳥のついでに任せよ」

有馬皇子はけたたましく哄笑した。朗らかすぎる笑みに、縛られた豪族どもは息を呑み、怯えたように見つめていた。

「余の者は？」

鏡郎女は問うた。宝大王は、ゆっくりと唇を動かした。

「殺すには及ぶまい。ただ、遠国へ流せ」

流す？ 思わず見返した鏡皇女に、宝大王は静かにつけ加えた。

「不要の恨みを買うべきではない」

謀反の輩は、厳しく死罪にすべし。鏡郎女は、さきほどそう献策し、宝大王の賛意を得たはずであった。そう問おうとした鏡郎女の口をふさぐように、大王は言った。

「額田郎女がそう献策した」

その名を耳にして、鏡郎女は、総身が強ばった。

額田郎女が献策？

その献策を、宝大王は諾し、この場で詔みことのりした。吾が献策ではなく……。

困惑する鏡郎女に眼もやらず、大王は立ち上がった。立ち上がった宝大王に、すがるように鏡郎女は問うた。

「葛城皇子と蘇我赤兄、王宮の側近く、控えてあり。彼等を如何すべきや」

謀叛を未然に報せ、防いだ第一の功は、かの二人にある。そう言いかけた鏡郎女は、首を傾げ、冷やかな眼差しで見る宝大王に口を嚙んだ。

「はて」

大王は眼を逸らして呟いた。

「有馬皇子が謀叛の謀を練りつつあること、すでに春の終わりには耳にしていたが」

鏡郎女の貌から血の気が引き、唇が震えた。春の終わり……。

すなわち、讃良と木幡が、有馬皇子に捕らえられた頃。宝大王が、病に臥せるようになった頃。

鏡郎女は、葛城皇子とともに、有馬皇子をして大王への謀を練らしめるよう画策した。そのことを、宝大王にはいっさい告げずにいた。宝大王に、そのことを知らしめ、鏡郎女の謀を打ち砕こうとした者があるとすれば、ただ一人……。

額田郎女め……。

「かの皇子の逆心を暴くために、吾は病を装っていた。汝も知っていたはず」

知らなかった……。額田郎女が吾が謀を知れば、必ず阻もうとすることはわかっていた。額田郎女の身辺は土蜘蛛どもに命じて厳しく見張っていたはず。

その監視の眼をすり抜け、額田郎女は、宝大王を動かした……。

采女どもが音もなく歩み寄り、老い病んだ女帝を支えた。宝大王は踵を返し、ゆっくりと太極殿の奥へと入っていった。

有馬皇子に謀叛を起こさせ、これを大王に報せることで、葛城皇子を政事の中枢へと復せしめ、三韓出兵を推し進める……。鏡郎女の策を、額田郎女は挫かせた。宝大王は、額田郎女の献策を入れ、病を装い、有馬皇子のみならず、鏡郎女や葛城皇子をも欺いたのだ。

——どこまでも、さかしらな……。

わずかに唇を噛みしめ、拝礼する鏡郎女の耳に、有馬皇子の哄笑と、命を救われた豪族どもの感謝の言が響いてきた。

有馬皇子は、飛鳥の南西なる木の国との境の山中で、無惨な肉塊となって吊され、三日呻吟し

た後に、絶命した。皇子の謀叛に加担した豪族どもは遠い東の国へと追放されたが、その一族の罪は問われなかった。

皇子の謀叛を報せた葛城皇子も蘇我赤兄も、とくに褒賞も与えられず、岡本宮への参内も許されなかった。

その岡本宮や渠を囲む柵はそのまま扱われることなく、飛鳥は再び鎮まった。大王位を継ぐ資格ある皇子が一人消えた。それだけであった。

やがて、宝大王の病が快方に向かいつつあるとの報せが、飛鳥じゅうに伝わった。しかし、一度は流れた大王崩御の噂は、すでに老いつつある宝大王が、次の大王位に誰を即けるのか、その意をめぐって、ひとびとの憶測を呼んだ。

有馬皇子の謀叛を報せながら、未だ許された様子のない葛城皇子か？

亡き田村大王の子とはいえ、宝大王の血を引かぬ大海人皇子か？

ともに決め手を欠くが故に、豪族どもは争って二人の皇子の門を叩いた。いずれが次の大王となってもよいように、双方に誼を通じておこころの腹である。

やがて豪族どもは、葛城皇子に親しい者と、大海人皇子に親しい者と、二つに別れた。

大海人皇子は何もしなかった。

確かに、何もしなかったが故に……、大海人皇子に親む豪族の数は、日に日に増え、もはや飛鳥でも蔑ろにできぬ権勢を、持ちつつあった。(第三部・了)